

専門分野のスキルアップを応援。 国内留学制度「NHOフェローシップ」。

国立病院機構では全国143病院のネットワークを活かし、研修医・専修医の方々のスキルアップを応援する「NHOフェローシップ」を用意しています。短期間で専門ジャンルの知識がしっかり身につく、所属病院では経験できない症例などを幅広く経験できる点が魅力です。国内留学を経験された先生の声をご紹介します。



旭川医療センター 呼吸器内科
鈴木北斗

DATA

留学先病院：東名古屋病院
留学日程：2017年1月1日～2017年3月31日
留学期間：3カ月間

経験者の声

呼吸器感染症（抗酸菌症・真菌症）および 慢性呼吸不全管理修得プログラム

所属病院では少ない症例を診療。
今後につながる知識と経験が得られました。

2017年1月から3カ月間、「NHOフェローシップ」の制度を利用して東名古屋病院にて研修を行いました。東名古屋病院は非結核性抗酸菌症および肺結核、肺真菌症の診療において国内有数の経験があり、また研究にも注力されている病院です。

私は初期研修医の時から旭川医療センターにて勤務しており、初期研修中には他病院にお世話になる機会が多かったものの、後期研修以降は他施設での診療経験がほとんどありませんでした。そのため、他病院での診療を経験したい、ここ数年で患者数が増加している非結核性抗酸菌を含め、抗酸菌の治療経験や呼吸不全に対する呼吸療法の経験が積みたいといった思いがありました。そんな時に当時の上司からフェローシップ制度の紹介があり、今回の研修が実現しました。

研修中は慣れない環境やシステムに戸惑ったものの、

段々と慣れて動けるようになり、多くの入院症例を担当させていただきました。症例も旭川医療センターではあまり経験できない症例の診療ができました。しかし、3カ月という期間のため、慣れたと思ったところに研修期間終了となり、今となってはもう少し長期の研修をお願いするべきだったかとも思います。とはいえ、比較的短い期間ながら多くの症例を経験させていただき、結核の治療・管理や非結核性抗酸菌症、肺真菌症の治療など今後の診療につながる知識や経験を得ることができたという実感があります。

今後は旭川医療センターでの診療において経験を還元していきたいと考えています。小川先生をはじめ、東名古屋病院呼吸器科や職員の皆さま、機構本部や東名古屋病院職員の方々には大変お世話になり、感謝申し上げます。

Experience ロサンゼルスVA留学記

海外留学制度を活用して 最新医療の現場を体験

多彩な人種が暮らす アメリカ社会ならではの 医療システムを経験

東京医療センター 小児科
河津桃子

(1) 参加したプログラムの内容および主旨

平成29年度の海外留学研修についてご報告します。ロサンゼルスにあるVA Greater Los Angeles Healthcare System（以下、VA）で5週間の臨床研修を行いました。私は小児科医として働いていますので、普段は15歳以下の患者の治療にあたることが多いのですが、VAは退役軍人対象の病院で、小児科がなかったため、Social Work 2週間、Primary Care 3週間の研修をさせていただきました。

Social Workでは、入院患者のメンタルヘルス、透析、自殺防止、薬物療法、緩和ケア、内科・外科・救急などの各科、PTSD、ホームレスなど、各部門を見学させていただきました。

VAには、300人弱のsocial workerが働いており、各部門で専門性のあるsocial workerにお世話になりました。アメリカでは修士課程以上を卒業し、intern後にsocial workerになるため、かなり専門性の高い職業になります。

Primary Careでは、residentの初診外来に2週間、入院チームの回診、カンファレンスなどに1週間参加させていただきました。アメリカではメディカルスクールを卒業するとresidentになります。私が研修医の頃を思い出すと、residentが対等に話せたとは思えないほどの知識量を持っていました。Residentの3年間で終わるとfellowになり、その後Attendingになります。Attendingは日本の主治医に当たり、fellowは各科によって年数が変わるようです。

VAはUCLAの関連病院で、日本の中規模一般病院にあたり、先進医療を行っている病院ではありませんでした。Residentは日本とあまり変わらない生活をしているように見えました。

初診では1人で現病歴をとり、治療方針まで考えて、上級医にコンサルトした後、患者に説明していました。患者1人あたりの時間が最低30分取られているのに対し、30分に3人の枠が取られている日本と比較すると、時間に余裕があったように思います。部屋もすべて個室で、ドアを閉めきって話をしていましたので、プライバシーの管理も徹底しているように感じました。英語を聞き取るのに精一杯の時もありましたが、質問すれば丁寧に教えていただけて、非常に勉強になりました。

カンファレンスは毎朝、毎昼あり、非常に教育に熱心な病院だったと思います。保険に関し

ては、service connected という独自システムが使われており、一般的な保険制度は適用されていませんでした。

また、VAの関連病院である、UCLAの小児科を見学する機会にも恵まれました。病室がすべて個室で、プレイルームの豪華さに驚きました。UCLAの小児科病院自体が寄付で運営され、プレイルームも寄付できているということで、アメリカの文化が反映されていると思いました。美術館なども寄付で成り立っているところが多かったです。

(2) 留学で学んだことを、いかに活かすか

今回の体験を後輩に教えることで、自身の診療の質を上げ、国立病院機構の医療の質向上に貢献したいと思います。全室を個室にする、1人あたり30分の予約時間を取るなど、現実的には厳しいですが、プライバシーへの配慮や、丁寧に患者に接することなど、少しでも意識して診療にあたりたいです。また、日本のような国民皆保険は賛否両論ありますが、収入の40%をさまざまな保険の支払いに充てている医師がいたり、スラム街やホームレスの多さから貧富の差を身近に感じたりすると、日本のシステムの徹底性は一目置くものがあります。

(3) 留学生活に関して今後、参考となる情報



日常生活で感じたことは、日本人のような故郷がなく、多人種が集まった国であるということです。「人種のサラダボウル」と聞くと、カリフォルニア州は、白人約50%、ヒスパニック約30%、アジア系約10%、黒人約10%のようです。アメリカにいたことを忘れてしまうほど、ロサンゼルスには多彩な人種がいました。独特な英語を話す方もいて、私の英語力がもたられば、より奥深く理解できることも多かっただろうと反省しています。間違ふことをおそれず、積極的に話すことが英語上達の秘訣ではないかと思っています。綿密にスケジュールが決まっていなかった日もあり、いろいろ質問して自分から英語で話しかけるには勇気が必要でしたが、積極性が大切だと感じました。

最後に、不在中の代診を務めてくださった先生方をはじめ、海外研修の機会を与えてくださった国立病院機構本部の方々、現地でお世話になったVAの方々に深く感謝申し上げます。